

## 第5回 大月短期大学基本問題審議会

日 時 平成18年2月15日(水)午後2時～午後4時15分

会 場 市民会館4階会議室

出席者 【委員】11名

早川委員、田口委員、小林委員、内藤委員、小俣昭男委員、田辺委員、仁科委員、井上委員、武川委員、太子委員、河西委員(小泉委員、天野委員、小俣二也委員、久根口委員は欠席)

【事務局】

小泉参事課長、星野副主幹、佐々木、(以上企画財政課)、古屋副主幹、藤本副主幹(以上短期大学事務局)

### 議 事

#### 1 大月短期大学基本問題の審議について

会 長 前回の第4回までの中で活発な議論をいただきなんとか骨格的なものできあがったという状況である。今日の第5回審議会では事務局が用意してくれた答申の素案の内容について、付け加える部分があれば加え、表現の不適切な部分があれば修正等をして、最終的に答申の原案をまとめたい。

では議題に入ることとしたい。皆さんのお手元に「答申(案)」があると思いますがこの内容について順次審議をお願いしたい。まずは目次に今回の答申の全体的な構成について示してあるので、この構成でよいかご審議いただきたい。目次を見ると最初に、「はじめに」とあり、「第1章大月短期大学の設置目的とその意義・沿革」、「第2章大月短期大学の現状とこれまでの検討経緯」、「第3章高等教育機関を取り巻く環境の変化」、「第4章大月市の財政状況および課題」、「第5章今後の方策について」ということで5章構成という点についてご意見はありますか。もしなければとりあえずこの構成でご了解いただいたこととして、内容に入りたい。細かい点はともかく骨格が間違っている、表現が違うなど直すべきところがあれば順次指摘していただきたい。では「はじめに」について審議したい。

(事務局から答申素案「はじめに」を説明)

会 長 表現に不適切な点等があればお願いします。

特になければ、細かい修正はあると思うが、趣旨としてはよいのではないかと思う。では第1章に進みたい。

(事務局より答申素案第1章を説明)

会 長 ここはこれまでの短期大学の生まれてきた状況、建学の精神というところ

ですがいかがですか。

委員 第1章のタイトルが「大月短期大学の設置目的とその意義・沿革」として  
いるのに、「(1)薄れてきた建学の精神」と合っていないような気がする。(1)  
があるから(2)もあるように思ってしまうがそうではない。「設置目的、意義・  
沿革」と言っているのに「(1)薄れてきた建学の精神」だけを言っている。第  
1章として「薄れてきた建学の精神」としてはいかがだろうか。あるいは、「薄  
れてきた建学の精神」を副題的にすると合うと思う。薄れてきた精神は私達が論  
じてきた内容と合う。副題とした方が他の部分とも合うと思う。

会長 第1章のタイトルは残し、副題として「薄れてきた建学の精神」とし、(1)  
を取るとのご意見だが、そのほうが合うかもしれないですね。よろしいだろ  
うか。他には何かありませんか。

委員 「必要な条件を満たすまでの過渡的な措置として、短期大学制度がスター  
トした」と書かれているが、実際には60年が経過している。過渡的としてスタ  
ートしていながら現実には過渡的なものではなくなっている。このように書かれ  
ていると、短期大学はなくなることが当たり前だと受け取られるのに、今回の答  
申は短期大学を残そうという内容である。

会長 「当初は」という語句を挿入し、「当初は必要な条件を満たすまでの過渡  
的な措置」とすることでよろしいだろうか。他になければ、次に進みたい。

(事務局から答申素案第2章(1)を説明)

会長 ここまでの部分について、ご意見をお願いしたい。

委員 志願者数が「年々減少傾向にある」という言葉が使われているが、確かに  
平成8年度から12年度の間は減少傾向にあったが、その後15年までは増加し  
ており一概に減少傾向とは言えない。志願者数が増加していた年も現実にあるの  
でこの表現は解せない。「年々」は取るべきだと思う。

会長 「年々」という語句を削除することでよいだろうか。他にありますか。

委員 文面の中で全ての表に言及しているか見ると、図表 の説明がない。大月  
短期大学の運営状況を説明する図表として から までがあり、 は大月短期大  
学を県内の他短期大学と比較している。 は入学者を見ると県内出身者の比率が  
低いということを言っている図表であり、載せる場所が違うのではないかと思う。

の志願者・入学者の推移の次に入れ、入学者は他の県内大学と比較すると県内  
出身者が少ないということを書けば良いと思う。

事務局 の表を と の間に入れ、本文は、学生数を述べている後のところに学  
生の出身別のことを言えばよいのではないか。

委員 やはり の図表は独立するのがよい。これは、県内の短期大学と、入学生  
の出身者の比率を表している図表だと思う。図表 から までが、大月短大単  
独の状況を表していることに対して、図表 は県内の他の短期大学と比較している。

これは県内の他短大と比較したときに大月短期大学のニーズはどうなっているかを言いたいものだと思う。

事務局 現状どうなっているのかということと合わせて両方を言いたい。

会長 ではこの表をどのように処理すれば良いのでしょうか。

委員 図表の位置はこのままにし、 の後に入れるというよりは、 として残す方が良いと思う。これは県内の学生を増やすのが良いかどうかということ議論する必要がまずある。資料の中で財政的な問題もある中で県内の学生だけが増えることが果たしてよいことかどうかということで、県外からこれだけ多くの学生が入学することで大月に住む学生がいるという部分もある。高等教育機関としての大月短期大学だけでなく、まちづくりのための大月短大、大月高校を考えると他の短大のように県内学生ばかりを増やすとその後の文章と合わなくなってくるから、この位置のままで良いのではないかと思うということを行っているのである。

委員 短期大学の傾向としては、近い場所にある学校を選択するという傾向が少なくない。大月短期大学の特性として県外の学生が多いという傾向があるが、今後は学生確保も競争であるので、県内からの学生確保にもがんばってほしいということを行っていると思う。

会長 の図表は残すことは良いが、それを入れる場所が の後が良いか今のままの位置にするのがよいかということだが。そして文言を加えるということでの処理したいがそれでよろしいだろうか。

ここで重要なところは、敷地の概要のところ、校舎敷地・運動場・第二運動場全てを共用ないしは短期大学専用と言えない。ここは下線をつけて強調してはどうかと考えたがいかがでしょうか。過去何回か審議会や委員会をもち、高校分離という答申が出ているが、財政的問題等の理由で分離はできないとしてきた。今回大月短期大学を残すためには、高校と短大を分離することが一番のポイントになる。これができなければ第三者評価結果も悪くなる。この点を強調してはどうかと考えたわけです。図表 の、「附属高校と一部供用、全面共用、短期大学の運動場とは言えない」というところに下線を付け、強調しておいたらどうか。これでは早く分離しなくては残せないということを市民の方々にも理解していただくために、いかがだろう、よろしいだろうか。では次に行きます。

(事務局から答申素案第2章(2)を説明)

会長 この中でお気づきの点はありますか。

委員 以上の経過をふまえて今回の審議会が設置されたということを入れておかないと、書かれていることはこれまで2回の経過だから、今回の審議会について触れた方がよいのではないか。はじめにの部分には少し触れているが、このような経過を受けてこのたび審議会が設置されたと書いた方がよいのではないか。

事務局 今回の審議会は、これまでの検討経過を踏まえた中で設置されたものではなく、状況の変化が著しい中で今後の短大の在り方はどうしたら良いかというところで諮問されたものです。議論を重ねていく中で、過去にもこのような議論があったのではないかとということで、過去の検討内容やその結果についてもお示ししたものであります。

委員 この章の最後に、過去2回審議会があって、どういう経緯だったということを書いているが、これは今までに18歳人口がピークを迎える時期がチャンスであったがその答申を実行せず、そしてもう一度チャンスがあったが実行しなかったということを行っているものだと思う。今は過去の答申を実行しようとしてもできない状況にある。つまり過去の答申はふまえることはできない。やるべき時に2回実行してこなかった今、大きな改革等の積極的な答申はありませんよということではないだろうか。

委員 これまでの経過をふまえて設置された審議会でないとするれば、あるいは過去の検討経過ではなく、時代の流れによってこの審議会が設置されたと書いた方が良いのではないか。

会長 「はじめに」の部分で過去このような検討がなされたということを入れますか。途中でそれを言ってしまうと、構成の中で崩れてしまうので、ここでは事実を淡々と述べるようにして、「はじめに」のところへ今おっしゃるとおり過去2度このような検討がされてきたが、そのときに実行されていないという文言を加えますか。中身になるこの部分では事実を淡々と述べる形になるように工夫してみたい。

そして最後の言い方が、非常に市に対して少し厳しい表現になっているのではないかと。すべてやらなかったのではなく、基金は積んできているし、当時着手できることはやったというところはある。この章の最後の文で、「着手してこなかった経緯がある」としているが、「着手することができなかった経緯がある」のようにしてはどうか。財政状況が許せばできたという状況もあったということです。また、その上の部分で、「～に努める」、「～を実施する」という表現をしているが、これについては大月市ではこのように努めた、実施したことなので、「努めた」、「実施した」という表現に直した方が良いのではないかと。よろしければ第3章に進みます。

(事務局から答申素案第3章(1)を説明)

会長 いかがでしょうか。この部分については、内容については良いと思うが文章を少し整理する必要があると思う。

この文言に対応する図表が3ページにわたってあるが、「18歳人口および高等教育機関への入学者数・進学率等の推移」のグラフを整理し、昭和50年以前の部分を削除して平成32年以降18歳人口が減少傾向に転ずる部分を加えるこ

- とができれば、その前の図表「18歳人口の推計」は必要なくなると思うのだが。
- 事務局 「18歳人口の推計」は事務局で作成したのですが、もう一つのグラフは事務局で作成していませんので、加工が難しいところです。
- 会長 18歳人口は、ここ10年ほどは急激には減少しないということが見えて、その後また減少傾向が大きくなるということがわかるといいのだが、2つめの図表はほぼ横ばいのところまでしかわからない。
- 委員 18歳人口の推移とともに、どこに進学しているかがわかる図表になっている。そして折れ線グラフと棒グラフが1つのページに入っており、これも分けたほうが見やすいと思う。また、字が非常に小さいので見づらい。
- 委員 棒グラフと折れ線グラフはリンクしていないわけではないが、別のことを表している。
- 会長 この図表を作り変えるのであれば、期間も昭和50年から前は必要なく、反対に平成32年以降の部分の載せてほしいが、できなければこのままということでは仕方がないだろう。
- 委員 現在の教育問題は団塊の世代から始まったという持論があるので、前の部分を切るとしても団塊の世代からのグラフにしてほしい。
- 会長 文章の中で、学校数について述べているところで、四大・短大を合わせていくつだったものが、どうなったということ表現すればよい。まず四大・短大の内訳でどのように変化したかということを使う、そして最終的に何校になったかを使うように工夫した方がよいと思う。ここまでよろしければ次に移りたい。  
(事務局から答申素案第3章(2)～(4)を説明)
- 会長 ここで何かお気づきの点がありますか。  
細かい点になるが、(4)で「県内においても、山梨県では・・・県立高等看護専門学校、・・・県立看護短期大学、・・・県立看護大学・・・」となっているが、ここは「県内においても」を削除してもよいと思う。
- 事務局 わかりました。
- 会長 他にご意見がなければ第4章をお願いします。  
(事務局から答申素案第4章(1)～(3)を説明)
- 会長 この第4章についていかがでしょうか。
- 委員 市政方針演説のようだ。これは審議会の答申であり、ここは簡素化してもよいのではないか。
- 委員 この審議会の設置が大月市自立計画に基づいたもので、行財政改革の一環だと思っている。自立計画を見ると、財政の状況が述べられ公共施設の見直しが重要と言っている。そしてこの審議会が設置されたというところにつながるのだと思う。大月市が今他にも立ち上げた審議会の小中学校適正化や附属高校などもこの自立計画に基づいているものだろう。今まで市から説明がなかったがここで

初めて出てくる。

会 長 いかがでしょうか。

委 員 このままでも良いと思います。

会 長 よろしければ第5章に進むが、ここが一番重要な箇所になる。

(事務局から答申素案第5章(1)を説明)

会 長 まず(1)ですがご意見をお願いします。

委 員 1月27日の山日新聞に次のような内容の記事が掲載された。大月短大生が、市内の中学へ出向き中学生の勉強サポートをしているという記事です。そしてこれが好評だと書かれている。せっかくこのような貢献をしているのだから、「中心市街地の賑わい対策を含めた大月市のまちづくりに貢献している。」という文の後に、この具体例も加えてほしいと思う。今回は1校だけだが、今後も希望があれば学生を派遣して行きたいという意向があるそうです。都留文科大学でもすでに行われているようだが、都留文大では教員になることも目標の一つであるが、大月短大ではボランティア的に学生が中学に出向き、自分のもっている知識を中学生にぶつけている。

会 長 それを加えたとしたらどの部分が良いだろうか。

委 員 3つめの段落で、「生涯学習を通じた学習機会の提供、ボランティアや社会活動への学生の派遣」とあるので括弧書きしてはどうだろうか。

事務局 おっしゃる段落では一般的なことを書き、次の段落でその具体例を書いているので、ここに加えてはどうでしょうか。

委 員 よいと思う。

会 長 では次の(2)へ進みたい。

(事務局から答申素案第5章(2)を説明)

会 長 ここはいかがでしょうか。

委 員 2点指摘をさせていただきたい。まず1点目として、すでに前の章の運営状況を述べているところでは就職率のことが書かれているのに、短大として存続させる意義のところでは就職率に触れていない。第2章でも編入学の次に述べており、ここでも編入学の後に加えるのが良いと思う。もう一点は、「「経済」系から発展した例えば「経営コミュニケーション科」、「情報ビジネス科」といった・・・学科再編も検討する必要がある」と書かれているが、情報に関してはすでに大学がかなり力を入れカリキュラムに組み入れられており、今後さらに充実させるということもすでに決まっている。「検討する必要がある」と表現してしまうと、何も取り組んでいないように感じられる。「さらに」「一層」などといった語句を加えていただきたい。

委 員 すでに内容に組み入れていても、外から見れば「経済」科であり、イメージとして情報についての授業が多くあることがわかりにくいことがある。

会 長 いわゆる看板と実態とが一致していない状況にある。「経済」という看板を掲げ、実態は「情報」にもかなり力を入れているというお話の通りだと想うので、むしろこの看板を変え、これを一致させるということだと思ふ。

委 員 科名を名称変更するだけで実態に合わせるということですね。

委 員 「再編」と言わずに、「学科についても検討する必要がある」と言った方が良いのではないか。

委 員 表現の問題になるが、カタカナ語の「トレンド」という表現はなるべく避けた方が良いと思う。

委 員 そもそもカタカナを使うことで志願者が増えるという状況はあるのか。

委 員 一般的にはたくさんある。大月短大では特にはない。

委 員 必要以上にカタカナ語は使わない方が良い。

委 員 日本語に置き換えられない言葉は別として、カタカナ語を多用することは好ましくないと思う。

委 員 「4年制大学に移行することは時期を逸している」と述べている部分がある。これは、「前2回の答申を受けて実施するには、時期を逸している」という意味のことだと思う。また、短大としての存続についての最後の方で、「第三者機関による大学評価」としているが、ここでは高校の分離を強調したいところであるので、これについては詳しく説明を書いた方が良いのではないかと思う。

事務局 第3章(2)で、大学評価の説明をする部分を記載していますが。

委 員 全部を読めば良いのだろうが、中には今後の方策しか読まない方もおられるだろう。高校との分離をはっきり強調するためには、必要ではないかと思った。

会 長 「第三者機関による大学評価」というところを、「文部科学省の認証機関による大学評価」と具体的に書けばよいだろう。他にありますか。

委 員 で、「市の財政を圧迫しておらず」というところは、短大はむしろ今の段階では市の財政に貢献しているのではないかと思う。そのように書いた方が良いのではないか。

事務局 市の財政に貢献しているとはどういうことでしょうか。

委 員 短大が存在し、学生が活動することによって大きな経済効果があることは知られています。そういう部分で市の財政に貢献している。

会 長 財政に貢献しているとまで言う必要があるかどうかということがある。普通は大学を設置すると財政を圧迫するものであり、大月短大は逆に言うと設備に投資をしてこなかったとも言えるが、財政を圧迫する状況になっていないことだけでも評価できる。ここは素案どおりの表現でよいのではないかと思う。他になければ次に進みたい。

(事務局から答申素案第5章(3)を説明)

会 長 最後の結論のところですがいかがでしょうか。

委員 直ちに実施すべきことの最初に、「教員・事務局員が一丸となって、定員割れを起こさないように学校訪問を充実」と書かれているが、すでにかなり努力をされている。「より一層の充実」というように表現を変えないと、これはこれから実施することではなく、すでに実施していることである。この表現では、大学が何も努力していないように思われてしまう。

委員 「より一層の充実」とすれば、現在も実施しているがさらに充実させるという意味合いになるのではないだろうか。

委員 同じところに、県内の比率を高めるとということが書かれていますが、これは具体的に何をすることを意味しているのか。

事務局 最近長野県内においても短大が新たに設置されているという例もあり、今までの実績として県外からの入学生が多くあるわけですが、県外だけでなく県内からも多くの学生を確保していかななくてはいけないのかなと考えました。

委員 県外では大月短大の良さは広く知られている。ところが、県内で聞くとこの良さがあまり知られていないことがある。

委員 大月短大では、男子学生の比率が上がってきているという明らかな傾向がある。優秀な女子が少なくなり、行き場のなくなった男子が入学しているのかという解釈もされるわけだが。県内の比率を上げるとは具体的にはどのように増やすことをイメージしているのか。

会長 短期大学とは本来開かれた教育機関であるべきであって、県内県外という境界を引くべきではないが、先ほど委員が言われたように大月短大は編入学の実績が高く、一流の国立大学へも合格していることを県内の方が知らないということがある。

委員 具体的に何をするかというと、県内の学校訪問を増やすことだろう。

委員 この審議会が始まったときに、山日新聞に「大月短大・附属高校存続論議スタート」という見出しで掲載された。ある先生からお手紙をいただき、県内からの志願者が今回大きく減ったということだった。つまり新聞に書かれてしまうと大月短大がなくなってしまうのかと不安に思ってしまう。短大がなくなってしまうのであれば敢えて選択しないということだ。先生方が県内で高校訪問をしても、廃止を心配する声が必ず聞かれ、志願者を出し惜しみするような傾向が見られるということだ。他県を訪問しても心配する声は全くないようだ、しかし新聞に書かれてしまうと影響が大きい。福井県や富山県の高校からは学校を訪問したいという要望もあり、他県では高く評価されても県内でなかなか評価されておらず足を引っ張っている状況である。

委員 データに出ているが、県外からの入学者は卒業後再び地元に戻ってしまうようだ。市外や県外からの志願者が減っている理由には、地元や東京の学校に行きやすいということがある。最近の傾向として、地方で地元の国公立大学等をめ

ざしたが失敗した学生が地元の大学へ再度チャレンジする傾向がある。かつての傾向はステータスの高い国公立を目指していたが最近では地元の国公立を目指すというように少し変わってきている。県外の方は地元や東京に行きやすい、女子も行きやすい、そして男子が残っているのかなというふうに見ることができる。地方出身者と市内の方が大月短大に期待する内容は違うのではないかと思う。

委員 第2章にある図表を見ても、県内外での比率についてはあまり変化していない。

委員 それに比べて男女比率は大きく変わってきている傾向にある。ここは明解な傾向が出ているのではないかと思う。県内の比率が高まるということは非常に結構なことだと思うが具体的なことがわからなかったので先ほどお聞きしたが、学校訪問を増やすとお答えいただいたので理解できた。

委員 第1回の審議会の後、甲府で山日YBSが主催して県内の大学説明会が行われた。あらゆる機会をとらえて学生確保に努めていかななくてはいけない状況にあるはずだが大月短大は参加していなかった。

事務局 事務局でも話題にしていたところ、主催側から、大月短大は来ていないのかと学生からたくさん聞かれるので是非参加してほしいという要望をいただいた。予算を伴うことだが、学生確保がまず大事なことから来年度から参加します。

委員 先ほどの新聞記事に関係する話ですが、新聞記事を読み、またはラジオでの報道を聞いたという数人の方から、短大がなくなってしまうのではないかという心配の声を聞いた。新聞記事は県内へ広く出ており、また審議会の最初の人に新聞に載ったので、今年度の学生募集に影響するのではないかという心配があった程である。特に今年と来年は学生募集にさらに力を入れていかないと、一度新聞に出てしまっていることで存続ということが次に新聞に載ったとしても必ずそれを読むとは限らない。マスコミの影響は大きいので、県内では高校での進路指導にも大きく影響している面もあると思う。その認識を変えるためには県内での学生募集にはさらに努力する必要があるのではないかと思う。

委員 別の箇所になるが、「附属高校は早期に分離移転もしくは廃止」と書いてしまっているが、この審議会と並行して附属高校の審議会が設置されているわけであり、「廃止する」という言葉を入れることはいかがなものかと思う。廃止論が新聞を賑わしてしまう恐れがある。新聞の記事が学生募集に与える影響は非常に大きい。「廃止」という言葉は必要ないと思う。

会長 ここでは、過去2回答申で方針が示されてきたが、実行できていない状況がある。大月短期大学存続活性化のためという前置きはあるが、そうではなく「第三者機関による大学評価が始まる平成20年までに、附属高校を早期分離移転」としてはどうか。期限を切ってそれまでに分離移転とした方が良いのではない

いかと思う。

委員 最後の部分の、存続条件の中で、「第三者による付属機関等を設置し」とあるが、要は審議会を立ち上げ検討を始めることなので、「審議会等を設置し」とした方がわかりやすいのではないか。

委員 存続条件については、全部削除してもらいたいと思う。この答申による影響は大きいという中で、存廃の審議を行うと書いてしまうと、インターネット等でも全国から見ることができるので、例えば運営委員会等を設置するとか、審議検討しなめすというような言い方に変えることはできないものか。

委員 ただし平成20年度から大学評価をしますね。そのためには19年度には施設設備の改修をしていなくてははいけない。となると、18年度中には方針を決定しなくてははいけないということですよ。

委員 来年度中には決定しなくてははいけないということですよ。

委員 もう一つ、現在小中学校の適正配置の審議会において、統合についての検討が進んでいるようだ。数年後にはおそらく市内の小学校または中学校の校舎が空くのではないか。高校分離について、今までは何も施設がないところから分離を始めると大きな費用がかかってしまうところを、その空いた施設を利用して分離移転することになれば費用が低く抑えることができるのではないかと思う。ただし確かなことかどうかはわからないので実際はどうなるかはわからないが、可能性としてはあり得ることだと思えるので、20年度には方向性が見えてくるのではないかと思う。

会長 高校の審議会ではないので、高校の方策についてまで議論する必要はないわけだが、存続条件の中で「もしくは廃止」という語句は削除した方が良さだろう。そして20年度には大学評価を受けるので、その時点までに高校分離がされていないと施設面で改善命令が出るということにおそくなるであろう。

委員 分離して施設が整備されていないと指摘を受けて、指摘を受けると公表されるので、ああだめな大学なのだと思われる。

委員 すでに施設整備の計画があるとしても公表されるのだろうか。

会長 現状はこのような状況であるということは事実であって、改善せよということは言われるかもしれないし、その公表は大月短期大学にとっては名誉なことではない。そういう意味ではハンディになってくる。できればその前に分離して整備されている方が、悪い評価をされずに済むということではある。

委員 しかし時間的には難しいだろう。

委員 そうは言っても時間的に猶予はないと思う。高校の改革についてもすでにタイムリミットだと思う。

委員 「2年以上・・・審議する」という文章を入れるか削除するかということだと思える。

委員 平成20年に評価されるということは決まっているのでそれをはっきり  
謳い、直ちに実施すべきこととして、「そのための解決すべき課題の検討を行  
うための運営委員会などを設置」することを強調した形で書き、すぐに検討しな  
くは間に合わないとすべきではないか。

委員 平成18年度中に結論を出さないと間に合わないだろう。

委員 2年連続して欠員が生じるというよりも、第三者評価から来るところの危  
機までの時間は1年しかない。

委員 マイナスな言い方ではなく、「対応すべきだ」というような前向きな表現  
で謳えば良いのではないか。

委員 本来定員割れしたときはもう最後だという話は以前からしてきた。存続す  
るとしても危機的な状況は変わらないので、最後の命綱があった方が良いとい  
うことで存続条件があるわけである。存続条件がないのであれば今まで行って  
きた議論が変わることになる。

委員 2年どころではないという認識がある。

会長 ただし第三者機関が評価し改善命令が出たからと言って、それで廃校にし  
なくてはいけない理由はない。大月短期大学として2年続けて定員割れがあるよ  
うな状況では、廃校に追い込まれるという状況である。このような状況になっ  
た場合には直ちに審議会を立ち上げて審議する必要がある。

委員 風説ではなく現実的にこの短大は基準を満たしていないということをお  
上から言われるということはとても痛い。風説よりも痛いことである。

会長 もう一つは、前回の議論の中で大学の在り方、このままで存続できるか  
という、10年ほどは18歳人口の減少がなだらかであり今後の10年は存続で  
きるとしても、10年後にはわからない。大月短期大学を存続させていくた  
めには何らかの在り方を検討しなくてはいけないということもこの際加えな  
くはいけないのではないだろうか。大月市では産業が非常に落ちてきている。  
ここで大学が消え、高校が消えてしまうと大月市はどういう街にするのかとい  
う問題が出る。そのときに短大にがんばってもらわなくてはいけないとい  
うことがあるかもしれない。そういった意味も含めて、そうは言っても定員割れ  
が出てくる可能性もないとは言えないので、併せて検討してくれといわな  
くはいけないのではないか。

委員 今おっしゃったことは定期的に検証するという事ではないですね。これ  
は明確に入れた方が良くと思う。

委員 「県内学生比率が高まるよう」という文があるが、これは逆に見ると県外  
からの学生比率が下がることになる。教職員が一丸となってPRに努めよう  
というときに、県外からの受験生に与える印象に足を引っ張ることになる  
のではないか。ここは敢えて県内外を言う必要はないのではないかと感じる。

委員 県内からの受験生を増やす必要はある。あとは入学試験で優秀な学生を入学させれば良い、そうすればさらに編入学実績が高くなる。

委員 県外の学生を締め出すのではないかという印象を与えないだろうか。

委員 入学試験はフェアなのでそういう心配はないと思うが。

委員 入学試験がフェアであればあるほど、このような表現は必要ないのではないか。

委員 学生比率を高めるのではない、受験生を増やすということですね。入学生ではなく志願者を増やすということ。

委員 志願者を増やすという話しになったので意見を述べさせていただく。外国籍の学生について考えると、国際化が言われはじめた12～3年ほど前、県内の国際交流の会議には必ず大月短大の学生がいた。都留文科大学や山梨大学、県立女子短大より早くから外国籍の学生を受け入れていた。現在は逆転し大月短大の外国籍の学生は非常に少なくなってきたと思う。今後学生を増やすという点では、外国籍の学生を増やす方向も検討した方が良いと思う。

事務局 社会人、留学生、帰国子女という枠で5名の定員が決められている中で、現在在籍している学生の出身は中国、台湾、各学年に3名ずつ来ています。来年度はその枠で受験をした学生が2名おり、日本語能力が結果に響きそのうち1名が合格しています。

委員 現在これだけ外国籍の学生が全国で増えている中で、大月短期大学では少なくなってきた。今後学生を増やす上でPRの中に入れてもマイナス要因ではないと思う。

委員 枠は変えることはできるのか。

事務局 それはできます。

委員 留学生を積極的に受け入れるということは別の意味で一つのPRになる。そういうことがどこにも出てきていないので今後海外からの学生を受け入れることも考えていただきたい。

委員 それについては、表現は注意すべきではないかと思う。酒田短大の例があるので非常に難しい問題もあるのではないか。

委員 事が大きくなると負の面が必ず出てくる。国際化は一時期全て良いと言われていた時代があった。だが今は難しいということがでてきている。これは国際化が日本の中で広まっているということの意味していると思う。そのために問題が多くなり、負の面が出てきていることも事実である。それだけ一般化しているので、今後そういう傾向は強くなるだろう。答申の中で、どこかで国際化に触れても良いのではないか。

会長 今までのところを整理させていただく。直ちに実施すべきことの中で、「県内の志願者数を高めるよう対策を講ずること」とし、4つめの項目で「大月短期

大学の存続・活性化のため」という文言は削除し、その代わりに「第三者機関による大学評価が導入される平成20年を目途に」し、そのすぐ後の「もしくは廃止」は削除する。の存続条件の最後のところで、「2年以上連続して定員割れが発生した場合には、直ちに審議会を設置し検討すること」として、学生募集の妨げになることは本意ではないので、存廃といった言葉は使わないようにする。そして国際化についての話しは盛り込むべきだろうか。

委員 それは無理に入れてほしいという意見ではないので。

会長 長期的に大月短期大学の存続について研究を続けるという項目を盛り込みたい。ということでよろしいでしょうか。非常に貴重な意見をたくさんいただいたのでこれをもとに修正し、事務局で答申の原案を作る。それを委員皆様にお送りするので、直したい箇所があれば書いていただきそれを送り返していただきたい。審議会は開かないがその最終的に直したものを答申とすることとしたいがいかがでしょうか。

委員 答申を出すのが3月ということで、答申に用いる資料やデータは最新のものを使っていただきたい。

会長 答申の日程について事務局と協議した上で委員の皆様にはご連絡したい。

事務局 皆様に集まっていたく形での審議会は今回が最終回ということでよろしいですか。会長と事務局とで今回の素案に修正を加え、委員の皆様にお送りする原案を送り返していただき直したものを最終的に答申として、会長と副会長で答申をするという形でよろしいでしょうか。

一同 (異議なし)

会長 今日活発に議論いただきありがとうございました。おかげで大月短期大学の今後の問題について審議会としての意見がまとまりました。大月短期大学が良い短大としてますます発展するよう祈念して審議회를終わりたいと思います。ありがとうございました。

一同 (拍手)